

第20回へブンアーティスト審査会 審査講評

第20回へブンアーティスト審査会審議の中での意見をまとめた審査講評を公表します。審査の基準がよく分からないというアーティストや、今後自分のどこを改善し、どこを伸ばせばよいか分からないというアーティストに対して、これまで見えていなかった視点を示す光明になれば幸いです。

審査会を通じて、これからへブンアーティストとして活動するスタート地点に立ったアーティスト、これからへブンアーティストの審査を受けようとするアーティスト、全てのパフォーマンスアートや音楽演奏の道を志すアーティストに対し、さらに技術や魅力を伸ばしてほしい、また、既存の枠や殻から突き抜けてほしいというメッセージを込めています。

(審査会運営について)

東京都が指定した公園などの場所でアーティストが音楽演奏やパフォーマンスを行えるライセンスを交付するための審査、「へブンアーティスト審査会」も今回で20回目を迎えました。

今回は、例年より後ろ倒しされたスケジュールのもと、応募要項が公表された7月14日から8月17日の締切りの間に、パフォーマンス部門に105組、音楽部門に73組の合計178組の応募がありました。新型コロナウイルスの影響もあってか例年よりやや応募数の少ない審査会となりました。

9月下旬に行われた一次審査では、応募書類のDVDに収録された約5分間の各アーティストの活動の様子が分かる動画を審査委員が視聴し、議論や感想を述べ合いながら、委員が魅力や独創性、将来性を感じ、観客を前にした実演を実際に見てみたいと評価したパフォーマンス部門36組、音楽部門17組の合計53組のアーティストを、一次審査通過者として選定しました。

二次審査は、一次審査通過アーティストに、実際に観客を前にしての制限時間約15分の公演を行ってもらい、その公演の様子を審査する公開審査会として、12月1日から3日までの三日間、池袋にある東京芸術劇場の劇場前広場や劇場内のオープンスペースやリハーサルルームで行いました。今回は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、例年とは違い、観覧には事前申込制をとり、観覧スペースを区切り、スペース内の人数を管理・制限した上で実施しました。

(審査講評について)

二次審査を通過した、最終合格者は、別紙のとおりとなりますが、三日間、実演を見た直後に行う審議の中では、審査委員から審査の基準や評価の考え方の参考になるようなコメ

ントが挙げられましたので、部門別にご紹介します。

(パフォーマンス部門)

パフォーマンス部門では、合格点に達するようなアーティストの評価できる点として、以下のようなコメントがありました。

○色々な種類の技を披露しているが、一貫して自分が表現したい世界観が見て取れ、その世界観の中でそれぞれの技が成立している。

○与えられた15分間を十分に使い、表現したい世界観を作りこんでおり、一幕の何かを見た感じになった。

○選曲も良く、メイクも本人にあっていた。特に目が印象的に映った。

○とにかく明るい。明るい雰囲気やキャラクターに好感が持てた。ステージに立つ人として、良い人柄が表れると期待が持てる。

○今回はコロナの影響下での公開審査会で、盛り上がる雰囲気を作って維持するのが難しい中、観客を一つにし、今日一番の盛り上がりを作り上げた。なかなかできることではない空気を作り上げた。

○衣装も道具も同系色でまとめ上げ、観客から見られるビジュアルにもちゃんと気を使っている様子がうかがえた。

○メンバー間で技術レベルがバラバラであることを敢えて逆手に取り、見せ方、活かし方をユニークに工夫するショーの構成力があつた。

○オーソドックスな内容だが、観客が予測しているところを先読みして裏切るところなど、しっかり構成されていた。また、テンポもどんどん良くなりその相乗効果にプロフェッショナルリティを感じた。

○間が悪いところもあるが、本人のキャラクターがそれをカバーしていた。キャラ的に何か持っていそうな気がした。

○文句なしのクオリティを表現した。ショーの作り方、観客の盛り上げ方、いずれも素晴らしかった。

○単純に物珍しさだけではなく、技術力、表現力の高さでも道行く人の足を止める魅力があつた。

○技術レベルの高さで合格点に達している。スピードもあり、ミスも少ない。練習量も相当多いことがうかがわせる。

○完全に見入ってしまった。劇場以外では見ることはないような演目も、あのような場所で見るとこんなにも魅力があるものかと認識を改めさせられた。パフォーマンスとして見られること自体が非常に貴重で、すぐそばで、いいものを見させていただいた。

○余計なことをせず、色々丁寧よかった。考え抜かれた演出のたまものだと思う。

○会場内の一体感がすごかった。完全に観客の心をつかんでいた。初めて見た人へのインパ

クトもすごかったと思う。

○オリジナリティとユーモアがある。衣装の変化も面白い。トリッキーだったが、笑いだけで終わらず、教養も頭に入ってきた。ある意味、演目に対する真摯なまじめさが伝わった。

○今まで見たことがある同じ種類の演目とは段違いの魅力的な見せ方だった。体の使い方も大きく、美しく、時間の使い方も見る側にストレスを感じさせなかった。見せるから魅せるレベルに達している。

○プロの技を見た感じ。独自の動き、自分の中で作り出した動きをしていた。世界観も含め、ずば抜けていた。

○ペインティングや衣装も含めデザイン・美術がきれい。屋外で見られることを前提にデザインが考え抜かれている。世界観にひかれた。

○演目内容はオーソドックスだったが、ステージングが手馴れていた。種類の違う演目を組み合わせる無理なく自然な流れで一つのプログラムに仕上げていた。

といったコメントがありました。

一方で、あと一步の所で届かなかったアーティストに対して改善を検討すべき点や合格に達したアーティストでも評価につながらなかった点として、次のようなコメントがありました。

○色々な種類の技を披露しているが、どれも技術的に飛びぬけたものがなく、本人らしい特徴もない。結果的に途切れ途切れな印象になり、盛り上がりには欠けていた。

○15分の持ち時間があったが、かなり早い時間で終わってしまった。ヘブンアーティストとして公演する30分程度のショーでは、果たして間が持つのか疑問

○出来るだけ色々な種類の技を披露することが、今の流行りなのかもしれないが、メインでやりたいものが感じられなかった。表現として弱く、華がないと思った。自信のなさを数でカバーしていた印象、どれか一つで勝負するのが怖くて、保険としてほかの小技を入れている印象を受けた。

○ショーに必要な体の基礎的な動きを疎かにしていると評価にはつながっていかない。ダンスやパントマイムなどの体の動きの基礎を学んでほしい。また、そのようなアドバイスを受けることで表現の幅がぐっと向上すると思われる。

○小道具や衣装、メイクなど、ステージに上がる以上、細部にこそ目と気を配ってほしい。総合的に見てビジュアル面も重要な評価のポイントになる。

○ステージ上のトークのやり取りも考えてほしい。観客を置いていくような話や、内輪だけで盛り上がっているような話など、客観的な視点が欠けていると思われるものがあつた。演出としてあえてやっているかもしれないが、効果的なものではなかつた。

○技術的に高度なことをやっているが、見せる範囲がどれも小さいので、もったいない。観客の多い会場になると見た目にも弱いものになってしまう。ショーの組み立て方を教わ

ったほうが良い。

○ステージの空間をどう使うか意識しているアーティストと、していないアーティストがいた。例えば、あまりに客席から後ろに離れてパフォーマンスをしていると、堂々とした感じに見えなくなってしまうので損していると思う。

○ヘブンアーティストとして公演することになった場合を想定して審査している。内容的に合格点に達していても、音量の大きさや原状復帰などの後始末で配慮が足りず、借りる会場や他のアーティストに迷惑をかけることが想定されれば当然ライセンスを渡すことは難しくなる。

○ありきたりで安易な演目で、ショーの構成や内容からプロフェッショナルリティを感じられなかった。

○自分だけが楽しんでいるような独りよがりな内容に感じ、観客としては置き去りにされた気分になった。

○演目の意味するところや文化的背景を観客に知ってほしいということであれば、もう少しトークやレクチャー部分を分かりやすく、伝わりやすい方向にとらえなおしてほしい。そういったところにも人に伝える工夫、見せる工夫が必要。

○動きが単調に見えた。観客の拍手も特に起きなかったので、会場の空気はあまりあつまっていなかった。その場の空気づくりができていない感じがした。

○これまで見たことがあるような技ばかりで、「おっ！」と思う瞬間がなかった。15分の持ち時間も早めに終わってしまったので、もっと見せ場をうまく作る必要があった。

○まだ未完成な印象で強く推したいと思うような部分がなかった。色々やっていたが、これというものが無い印象を受けた。

○小技もあって流れもあるが、まだ足りない。ダンスと同じように、またダンス以上に身体能力を使ってコントロールすることを探求してほしい。

○ジャグリングも数を増やすことを競うのではなく、限られた数での見せ方を開発していくというアプローチが今後注目されると思う。芸術性を持ったジャグリングの方向性を応援していきたいが、世界観や色が出せるよう頑張してほしい。

といったコメントが上がりました。

(音楽部門)

音楽部門では、合格点に達するようなアーティストの評価できる点として、以下のようなものがありました。

○演奏レベルが非常に高い。全編を通して全く問題がなく、本当に良かった。

○オリジナルの楽器の色彩が良く、屋外でも楽器の色がビジュアルとして映えると思う。衣装にも工夫があるともっと良い。

○機材トラブルを未然に防ぐメンテナンスをされていてほしかったが、機材トラブルがあっ

でも、動揺なく何事もなかったように演奏しきった技術と心の強さを感じた。

○前回審査会を踏まえ、演奏や演出に工夫の跡が見られた。

○異なる楽器同士のめずらしいユニットで、希少性という点も評価できる。

○コンパクトな演奏形態と機動力は、ヘブンアーティストにはもってこいな感じがした。

○ルックス、ビジュアル、清潔感いずれもよく、演奏もうまい。特に隙がないことが欠点かもしれない。

○演奏上の欠点が多いのが目に付くが、逆にそこが改善した時に一気に伸びる可能性がある。熱意ということかもしれないが、魅力につながる何かがある。

といったコメントです。

一方で、あと一步というアーティストに対してや合格に達したアーティストに対しても改善点や評価につながらなかった点として

○技術が伴わず、アマチュアの延長という気がした。訓練されていなさが目に付いた。

○それぞれのパートの音量がバラバラで、聞いていてムラができています。全体の統率が取れていない。

○主旋律を奏でる楽器、打楽器など、楽器ごとの音量のバランスが考えられておらず、メリハリがなかった。

○ずっと同じ音量だった。もっと音楽的にメリハリをつけた方がいい。音楽上の演出が少し足りない。割と平板に聞こえてしまう、編曲の余地もある。

○衣装を考慮した跡が見られず、メンバー全員が普段着のまま出てきたので、ショーとして見せるならそれらしい工夫も必要ではないか。

○両手を使って華やかに演奏できる楽器でありながら、片方の手の演奏範囲が狭く、華やかさに欠けていた。逆の手に意識が行き過ぎている感じがし、全体的に音の厚みがない。

○演奏者同士仲が良さそうなのは、美点かもしれないが、演奏は良くも悪くも普通に、無難に聞こえてしまう。もっと演奏の中で競った方がいいのではないか。

○欠点は少ないが、それがおもしろくないところであり、魅力のなさにつながっている。ポテンシャルという評価にもつながっていない。

○15 分の間に演奏した曲が、どの曲も同じに聞こえた。どの曲も同じ解釈でやっている印象がある。選曲や構成が違おうと、聞こえ方も変わってくると思う。

○演奏者同士、息があった感じもなく、終始それぞれが演奏している感じで、しっくりこなかった。

○コーラスのバランスが良くない感じがした。ハーモニーが合わないところが聞こえてきた。

○演奏がラフすぎて、アンサンブルが中途半端に聞こえた。複数で演奏しても、センターとその他伴奏のように聞こえてしまい印象に残らず、説得力が落ちてしまっている。

というものがありません。

(全体総括)

審議の中の議論では、新型コロナウイルスの影響で、今回の応募者は例年より少なかったが、公開審査会で実演を見てみると非常に粒がそろっていたという話がありました。粒ぞろいのアーティストが出そろった背景には、このヘブンアーティスト審査会を締めくくる「審査講評」も今回で4回目を数え、審査を行う観点や意図、訴えていることを理解してもらっているのではないかと分析がありました。この審査講評で審査委員が投げかけたメッセージをアーティストが翌年の審査会の実演で返してもらっているという、審査委員とアーティストの立場を超えたコミュニケーションに手ごたえを感じているといった話もありました。このコミュニケーションのやり取りが、パフォーマンスアートや音楽演奏といった表現がらせんのように向上する仕掛けとして効果が見えてきたという意見があり、審査することの一つ意義として実感を伴って見出せるようになりました。

また、傾向として、新しいジャンルが出てきていることや、一般的には劇場で公演される演目やすでに競技演目として認知されているものも、新しい表現の場所としてヘブンアーティストの活動場所が選ばれていることが挙げられ、ヘブンアーティストのもう一つの特徴である多様性という観点からも非常に良い傾向にあるという話がありました。

同時に、こういった新たなジャンルに挑戦する人には、「ショーとして成立するかどうか」自分自身で再解釈することが厳しく求められる一方で、他の誰もやらないことへの迷いや焦りが必ずあるはずであり、こういう審査会をきっかけとして後押することこそ、あらたな表現の芽吹きと向上につながるのではないかと意見もありました。

パフォーマンスアートや音楽演奏の道を志す全てのアーティストに、さらなる飛躍を期待します。

ヘブンアーティスト審査会

審査委員長 森 直実

審査委員 (パフォーマンス部門) 芦部 玲奈、田中 未知子、乗越 たかお
(音楽部門) 梶 奈生子、湯浅 学